モンゴル国の義務教育カリキュラムにおける家庭科教育の位置付け

－我が国の家庭科教育との比較を通して－

原田　省吾

（岡山理科大学教育学部）

本研究では、モンゴル国の義務教育カリキュラムにおける家庭科教育の位置付けを明らかにし、わが国の小学校・中学校における家庭科教育との違いについて検証した。

モンゴル国の学校教育制度は、2012年の「教育法」改正により小学校5年制、中学校4年制、高等学校3年制へとシフトし、小学校・中学校の9年間を義務教育とする5・4・3制となっている。小学校、中学校には家庭科に相当する教科が存在していないが、小学校では教科「美術・技術」の中に簡単な調理に関する学習、教科「健康」の中に栄養素に関する学習が位置付けられている。中学校では、教科「デザイン・技術」の中に衣生活と食生活の学習が位置付けられている。わが国における家庭科学習の内容と比較すると、モンゴル国の家庭科学習は衣生活と食生活に関する内容の比重が大きく、特に衣生活の学習では技能面に重点が置かれていることが明らかになった。

キーワード：カリキュラム　家庭科　美術・技術　健康　デザイン・技術　衣生活　食生活

1. はじめに

(1) モンゴル国における教育制度の概要

モンゴル国の学校教育制度はソビエト連邦（当時）の 5・3・2 の 10 年制の流れを汲み、1990 年代後期には 5・4・2 の 11 年制であった。現行の教育制度は 2006 年に改正された「教育法」を基にしており、2008 年より 6・3・3 の 12 年制が導入された。その後、2012 年の「教育法」改正により小学校 5 年制、中学校 4 年制、高等学校 3 年制へと変更し、図 1 に示すような小学校、中学校の 9 年間を義務教育とする 5・4・3 制となっている（Ariunjargal, 2021）。

(2) 本研究の目的

モンゴル国では、1990 年の民主化を契機に日本への留学生の規模が次第に拡大することになったが、留学後モンゴル国に戻り、母国において日本式教育を取り入れた学校を自ら設立した人物がいる。また、2006 年には暗記中心の指導法から子どもの思考や発想を促す「子どもの発達を支援する指導法」への転換を図るべく、モンゴル国政府が独立行政法人国際協力機構に支援を要請する等日本式教育への関心が非常に高く、教育の分野において両国が交流を深めることは大変意義深いと考える。しかしながら、我が国におけるモンゴル国の教育に関する研究蓄積は多くはなく、家庭科に関する教育について報告されたことは管見の限り存在しない。

今後グローバル化が進展する中で、一人一人の生活行動が地球規模の問題に直結する現代社会では、自身のライフスタイルをさまざまな観点から考え、問題を解決していく力が求められる（大竹, 2015）。家庭科はこのような生きる力を育む教科であり、国の内外を問わず生活に必要な知識や技能を教える非常に重要な教科と言える。一国の中にとどまらず、グローバルに家庭科教育を見つめることで、両国の家庭科教育の本質や原点を再確認する機会を双方が持つことになると考えられる。

そこで本研究ではモンゴル国の家庭科教育に着目し、第一段階としてモンゴル国の義務教育カリキュラムにおける家庭科教育の位置付けを明らかにするとともに、わが国の家庭科教育と比較することで双方の家庭科教育に対する示唆を得ることを目的とする。

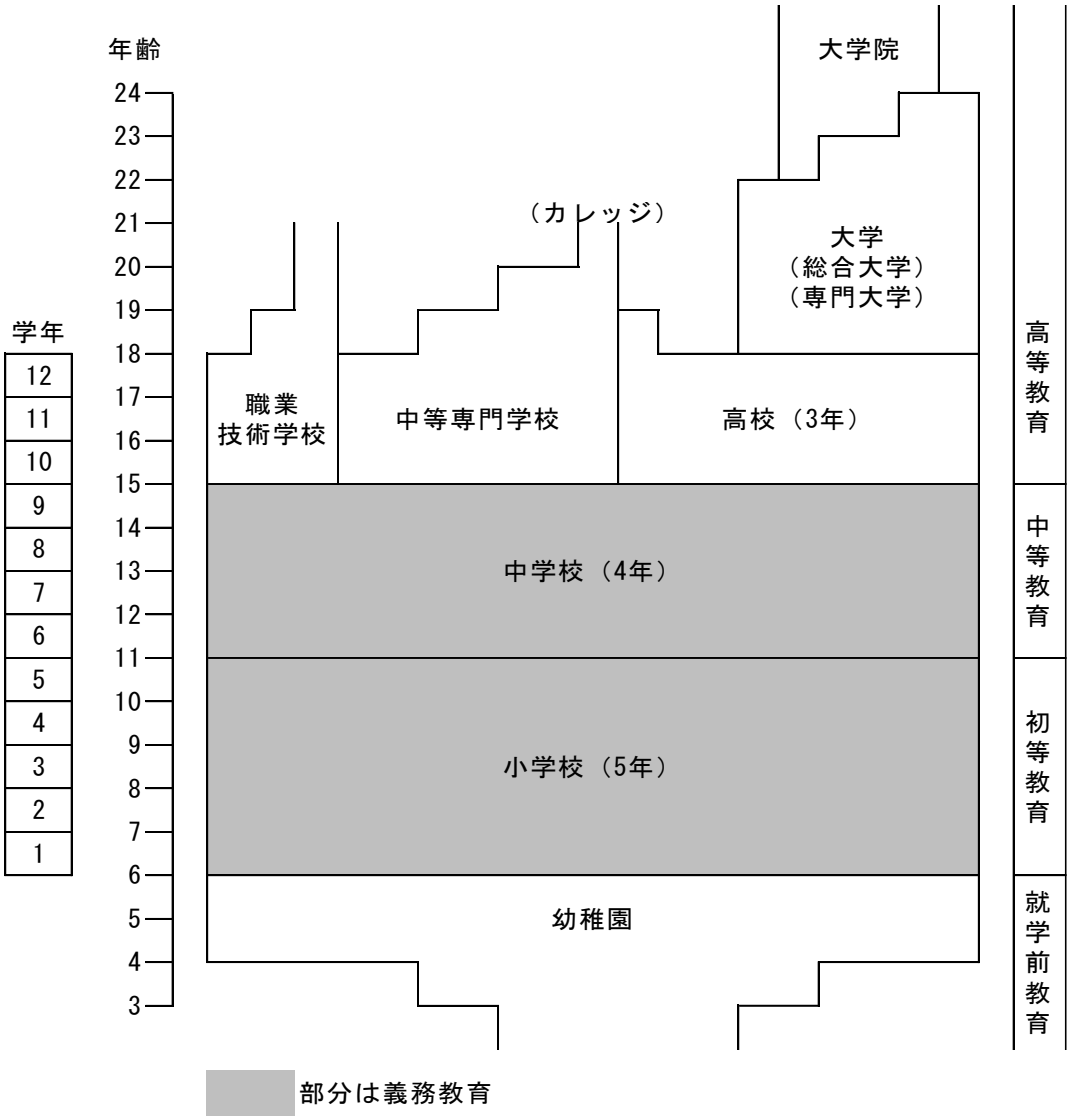

図１　モンゴル国の学校系統図

Ariunjargal, L.（2021）より引用

2. 方法

(1) モンゴル国において学習指導要領的なものとされている『初等教育カリキュラム 改訂第 2 版』（モンゴル国教育科学省，2019a）、『中等教育カリキュラム 改訂第 2 版』（モンゴル国教育科学省，2019b）を基にして、小学校及び中学校における家庭科教育の位置づけを明らかにする。

(2) モンゴル国の小学校、中学校における家庭科教育の内容と、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説家庭編』（文部科学省,2017a）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説技術・家庭編』（文部科学省,2017b）とを比較し、両国の家庭科教育に対する示唆を得る。

3. 結果

3.1. モンゴル国の義務教育カリキュラムにおける家庭科教育の位置付け

（1）初等教育

表 1 に示すように、小学校の必修教科は「準備カリキュラム」「モンゴル語」「公民道徳教育」「数学」「人間と環境」「人間と自然」「人間と社会」「美術・技術」「音楽」「体育」「健康」「英語」の 12 教科である。

表１　モンゴル国における小学校カリキュラム

No.	科　　目	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	計
1	準備カリキュラム	60	－	－	－	－	60
2	モンゴル語	192	224	224	224	224	1088
3	公民道徳教育	64	64	64	64	64	320
4	数　　学	112	160	160	160	160	752
5	人間と環境	64	64	64	－	－	192
6	人間と自然	－	－	－	64	64	128
7	人間と社会	－	－	－	32	64	96
8	美術・技術	58	64	64	64	64	314
9	音　　楽	58	64	64	64	32	282
10	体　　育	58	64	64	64	64	314
11	健　　康	－	－	－	32	32	64
12	英　　語	－	－	－	－	96	96
	合計時間	666	704	704	768	864	3706
	教員調整時間	64	34	34	34	33	199
	年間全時間						3905

モンゴル国教育科学省（2019a）より筆者作成

小学校において、教科としての家庭科は存在していない。しかし、小学校における必修 12 教科の学習内容を分析した結果、「美術・技術」と「健康」の 2 教科の中に家庭科の学習内容が含まれていることが判明した。

(2) 中等教育

表 2 に示すように、中学校の必修教科は「モンゴル語と文字」「数学」「情報技術」「自然科学」「社会科学」「芸術」「デザイン・技術」「体育・健康」「外国語」の 9 教科である。

表２　モンゴル国における中学校カリキュラム

No.	科　　目		第６学年	第７学年	第８学年	第９学年	全時間
1	モンゴル語と文字	モンゴル語	99	66	66	66	297
		伝統文字	66	66	66	66	264
		文　　学	66	66	66	66	264
2	数　　学		165	132	132	132	561
3	情報技術		33	33	33	33	132
4	自然科学	物　　理	33	66	66	66	231
		生　　物	33	66	66	66	231
		化　　学	33	66	66	66	231
5	社会科学	公民道徳教育	66	66	66	66	264
		地　　理	－	33	33	33	99
		歴　　史	33	66	66	66	231
		社　　会	－	33	33	33	99
6	芸　　術	美　　術	33	33	33	－	99
		音　　楽	33	33	33	33	132

7	デザイン・技術	デザイン	66	66	66	66	264
		技　術					
8	体育・健康	体　育	66	66	66	66	264
		健　康	33	33	33	33	132
9	外　国　語	英　語	99	99	99	99	396
		ロシア語	－	66	66	66	198
合計時間			957	1155	1155	1155	4422
教員調整時間							268
年間全時間							4690

モンゴル国教育科学省（2019b）より筆者作成

中学校においても、小学校と同様に教科としての家庭科は存在していない。しかし、中学校における必修 9 教科の学習内容を分析した結果、「デザイン・技術」の中に家庭科の学習内容が含まれていることが判明した。次節以降では、小学校必修教科「美術・技術」「健康」と中学校必修教科「デザイン・技術」における学習内容について詳細に見ていくことにする。

3.2. 小学校必修教科「美術・技術」「健康」における学習内容

(1) 「美術・技術」における学習内容

「美術・技術」の学習は第 1 学年からスタートし、学習内容は学年ごとに設定されている。いずれの学年も「美術」と「技術」の 2 項目で内容が構成されている。家庭科の内容は「技術」の中に、以下に示すようなものが設定されている。

第 4 学年

・手縫いの道具を、小物を製作するために使う。

・2～3 つの材料でできあがるおやつを作る。

第 5 学年

・一般的な手縫いの方法をぬいぐるみの製作で用いる。

・3～4 つの材料でできあがるサンドイッチを作る。

衣生活に関わる内容として、手縫いをするための道具の学習や、手縫いを用いた小物の製作実習が設定されている。また、食生活に関わる学習として、少ない種類の材料を用いた調理実習が設定されている。どちらの内容も基礎的・基本的で初歩から学べるようになっている。

(2) 「健康」における学習内容

「健康」は第 4 学年からスタートし、学習内容は学年ごとに設定されている。いずれの学年も「個人の健康と環境の健康」「栄養と運動」「メンタルヘルス」「良くない習慣」「性と生殖に関する健康」の 5 項目が設定されている。家庭科に関する内容は「栄養と運動」の中に次のように設定されている。

第 4 学年

・定期的に朝食をとり、活発な動きに慣れる。

・食品群を特定し、ラベルを使用して食品を選択する。

第 5 学年

・食品中の主な栄養素を考慮して、適切な栄養の原則に基づいて正しく選び、保存し、使用する。

・体の成長を評価し、自分に合ったアクティブな動きを定期的に選択することを習慣にする方法を学ぶ。

このように、食生活に関する内容として、食品に含まれる栄養素、食品群、栄養を考えた食品摂取について設定されている。

3.3. 中学校必修教科「デザイン・技術」における学習内容

次に、中学校の「デザイン・技術」における学習内容について詳細に見ていくことにする。

「デザイン・技術」の学習内容は学年ごとに設定されており、いずれの学年も「1 設計と製図」「2 加工技術」「3 技術」の 3 項目で内容が構成されている。このうち「2 加工技術」は、A と B の 2 つのグループに分かれて内容が示されている。この 2 グループの学習方法について、『中等教育カリキュラム』には「生徒は性別に関係なく同じ内容を学び、繊維・食品加工技術、木材・金属加工技術の 2 つのサブグループを選択して学ぶ」と記載されている。最終的に生徒は A・B 両グループ共に学習することになるのか、もしくはどちらか一方のみを学習することになるのかについて、本研究では明確にすることができなかった。

以下、各学年の学習内容を詳細に見ていくことにする。

(1) 第 6 学年

第 6 学年の学習内容は表 3 に示すとおりである。

表 3　「デザイン・技術」第 6 学年の学習内容

1　設計と製図	
a 円を等分して幾何学的な作図をする b 指定されたオブジェクトのモデルを 2 次元形式で設計し描画する c 動物や植物の画像を使用して装飾的なデザインを作成する d 指定されたオブジェクトの特性を分析し、形、サイズ、色、装飾を決定する	
2　加工技術	
A グループ a 簡単な手縫いと飾り縫いの種類を理解し、応用例から小物作りの必要性を判断する b 繊維を理解し鑑別試験をすることで、天然物質や植物物質、化学物質の使用を分析する c 裁縫道具の適切な選択と安全な使い方 d 簡単な手縫いと飾り縫いの種類を方法と使用法で分類し、小物を作り、縫い付けて装飾する e 応用例として結び細工やサンゴ工芸品の種類を知り、説明書や模式図を使って結び方を学び、それらを使って作品を作ったり飾ったりする f 半完成品を使って各種冷菓を作る g 食品衛生の例を説明する	B グループ a 木工品の例をもとに木材の種類と用途を説明する b 研磨により木材の色、パターン、輝き、密度を確認し、物理的特性を決定する c 簡単な手工具を使用して木材を横や縦に切断、結合、研磨、装飾することで、おもちゃや家庭用品を製作する d 安全な使い方で手工具を用いて作業することを実証する e 日常品と装飾品を例にして金属の種類と用途を説明する f 板金の切断、曲げ、圧縮、研磨を通して、おもちゃや家庭用品を製作する g ワイヤーを切る、割る、ねじる、通電する、装飾する等して、おもちゃやオブジェをデザインする
3　技術	
a 写真を使って技術開発（自転車）の簡単な歴史を説明する b 技術部品の構造と接続の種類を例を挙げて説明する c エネルギー源の種類と用途を例を挙げて説明する d 簡単なアニメーションを作成する	

モンゴル国教育科学省(2019b)より筆者作成

衣に関する内容として、手縫いと飾り縫いの種類とそれらを用いた小物作り、天然繊維と化学繊維の違い、裁縫道具の適切な選択と安全な使用法等が扱われている。また、結び細工やサンゴ工芸品といったモンゴル国の伝統工芸についても扱われている。

食の内容としては、半完成品を使った冷菓作り、食品衛生について扱われている。

(2) 第 7 学年

第 7 学年の学習内容は表 4 に示すとおりである。

表 4　「デザイン・技術」第 7 学年の学習内容

1　設計と製図
a デザインの背景に応じて、点、線、面を 3D で設計し描画する b 設計要件に応じたアイテムを設計し制作する c オブジェクトの図面やイラストに応じたサイズの変更方法を知り適用する d 円弧と直線を滑らかに接続させて描く e 手でオブジェクトをスケッチする f 画面上で作成する方法を使用して幾何学的オブジェクトのモデルを作成する

2　加工技術	
A グループ a 風合い、色、伸びの違いから平織、綾織、朱子織を判断する b 裁縫道具の使用法、把握、および指定された道具入れに保管することで、安全な使用法を遵守して実習する c 手縫いと飾り縫いを組み合わせて小物を作る d かぎ針や棒針を使って編物を製作する e 栄養豊富な食べ物や飲み物の例を挙げ、健康的な食事をすることの利点を説明する	B グループ a 木材の断面の違いを知り、正しい設計ができるようにする b 木の直径、断面を測定する c 木材を確認し、切る、つなぐ、紙やすりで磨く、といった方法を用いて製作する家庭用品をデザインする e 手動および機械による円筒体の加工 f 曲げ、破断、切断、乾燥、鋸引き、削り取りによる金属の技術的特性 g 切る、ねじる、曲げる、折る、折る、削る、磨く等を用いた板金製品の設計
3　技術	
a 技術開発の歴史（自動車開発の歴史など）をイラストで解説する b 機械式変速機の構造、部品、動作原理を用途別に比較する c 標識とマーキングによる電子部品の組み立て d 簡単なメカニズムと電子回路を使用して簡単な技術作品を設計する	

モンゴル国教育科学省(2019b)より筆者作成

衣に関しては、第 6 学年の内容に加えて、平織、綾織、朱子織といった織物の種類とその特徴、かぎ針や棒針を使った編物の製作を学ぶようになっている。

食については栄養のことに触れられ、健康的な食事について学習する内容が設定されている。

(3) 第 8 学年

第 8 学年の学習内容は表 5 に示すとおりである。

表 5　「デザイン・技術」第 8 学年の学習内容

1　設計と製図	
a 指定されたアイテムの物理的な設計を計画し開発する b アイテムのデザイン上の問題を解決する計画と描画、デザインの分析、アイテムモデルの作成 c 正射影によるディテール表現 d 指定された物を正射影で設計して描く e 不等角投影図による幾何学的オブジェクトの表現 f 焦点法で放物線を描きモデル図面に適用する	
2　加工技術	
A グループ a 伸びる、しわになる、縮む、形が崩れる、吸塵するなどの繊維素材の基本となる物理的、機械的、技術的特性を把握し、製作に使用する素材を選定する b 簡単なミシン縫いで小物を作る c スカートの縫い方 d 作品の製作に必要な材料、道具、作業の手順を計画する e 製作計画に従ってスカートを縫製し、装飾する f 棒針編みの裏編み、色編み、柄編み、課題別の物作り g 用途に応じたテーブルセッティングのための食べ物、飲み物、お菓子の準備 h 食事の文化とマナーを例を挙げて説明する	B グループ a 木材の曲げや切断の性質を知り、設計時に適切に判断する b 動物からアイデアを取り入れて、木のおもちゃの形のデザインを開発する c 木工用電動工具の構造や使い方、動作原理を絵や図を使って説明する e 切断、のこぎり、彫刻、穴あけ、やすりがけ、研磨といった方法で製作する木製のおもちゃをデザインする f 木でデザインされたおもちゃの例を用いて接合の種類を説明する g 曲げる、ねじる、切る、削る等の金属の性質を把握し、その性質を考慮して設計する h 家庭用に使用されるプラスチックの例を用いて熱可塑性プラスチックかどうかを判断し、設計に適したものを選択する
3　技術	
a 技術開発や発明の歴史（航空機開発の歴史等）を簡単な図を使って説明する b 機構構造と動作原理を比較する c 電子部品の種類、構造、機能、動作原理を具体例を挙げて説明する d 機械式トランスミッションと簡単な電子回路を使用して、簡単な作業を計画する	

モンゴル国教育科学省(2019b)より筆者作成

衣に関する学習は、繊維の素材による特性の違いを知り、製作物の用途に応じた繊維を選択できるようにする内容が含まれている。製作実習にはミシンが登場し、ミシンを使って小物を作ることに加えてスカートを製作するようになっている。編物も棒針を使って様々な編み方で小物を作るようになっており、より高度な技術を学ぶことができる内容となっている。

食に関しては、テーブルセッティングのための食事の用意、食事の文化とマナーについての学習となっている。

(4) 第 9 学年

第 9 学年の学習内容は表 6 に示すとおりである。

表 6　「デザイン・技術」第 9 学年の学習内容

1　設計と製図	
a 特定のアイテムの用途、性質、および特徴を反映させることで、商標デザインを作成したり改善したりする b アイテムのデザイン上の問題を解決する計画と描画、デザインの分析、製品プロトタイプの作成 c 製品のアプリケーションの設計を分析して新しい設計をする d ディテールのオーバーラップ法によるディテールの正射影における表現 e 正面、側面、および水平面でカットを作成し、等角投影の軸上の 1/4 カットで詳細を描写することにより、正射影で描写されるオブジェクト f 特定の製品で使用されるジョイントの必要性と機能	
2　加工技術	
A グループ a 天然素材や化学複合素材の特性と利用法 b ミシンの補助装置を使ってさまざまなステッチを縫う c 結び、伝統工芸、刺繍技術を使用した物のデザイン d 伝統的な方法で製作したモンゴル民族衣装 e 伝統的な方法でモンゴルの服を縫製するために、製作図を使用して、材料、用具、および製作の手順を計画し記録する f 手順と方法に従ってモンゴルの服を縫製し装飾する g 伝統的な方法によるヨーグルト、アールツ（固体のヨーグルト）、アーロール（チーズの一種）の製造 h 乳製品の伝統的な製造方法と現代の製造方法の違いを明確にする	B グループ a ナイフを右手で持ち、左手でナイフを支えて、パンチングと完全な彫刻を行う b 彫刻の種類に応じて工具と補助工具を選択する c 指示に従って特殊な用具と機器を使用して作業する e のこぎりと電動のこぎりを使い分けて、直線と曲線を持つ木工品を作る f 乾燥・硬化・焼き戻しに対する天然素材や複合素材の特性や変化とデザインへの応用 g 製品の例を用いて鍛冶の方法、種類、目的を解説する h 楽器の技術を例に楽器の動く部分の形を説明し、作品作りに生かす
3　技術	
a 技術開発や発明の歴史（船舶開発の歴史等）を説明する b 車の種類を用途別に分類し、例を挙げて説明する c 単純な電気回路や複雑な電気回路を利用して人間の労働を容易にする作品を設計する d コンポーネントの識別を利用してテクノロジーマシンの回路図を読み取る	

モンゴル国教育科学省(2019b)より筆者作成

第 9 学年の学習内容の特徴として、衣ではモンゴルの伝統衣装、食ではモンゴルの伝統食といった、自国の伝統文化について扱われている点が挙げられる。どちらも知識だけでなく実習としても取りあげられており、伝統技法について実践を通してより本格的に学んでいく内容となっている。

3.4. わが国の小学校・中学校家庭科教育における学習内容との比較

表 7 は、モンゴル国の初等・中等教育カリキュラムにおける教科「美術・技術」「健康」「デザイン・技術」の内容を中心として、わが国の平成 29 年版学習指導要領に示された小学校「家庭」、及び中学校「技術・家庭（家庭分野）」の内容を比較したものである。

表 7　モンゴル国初等・中等教育カリキュラムにおける教科「美術・技術」「健康」「デザイン・技術」の内容とわが国の小学校「家庭」中学校「技術・家庭（家庭分野）」の内容の比較

モンゴル国初等・中等教育カリキュラム		小学校「家庭」、中学校「技術・家庭（家庭分野）」
小「美術・技術」	第 4 学年	
	・手縫いの道具を、小物を製作するために使う。	小B(5)ア(イ)
	・2～3 つの材料でできあがるおやつを作る。	小B(2)ア(エ)
	第 5 学年	
	・一般的な手縫いの方法をぬいぐるみの製作で用いる。	小B(5)イ
	・3～4 つの材料でできあがるサンドイッチを作る。	小B(2)ア(エ)
小「健康」	第 4 学年	
	・定期的に朝食をとり、活発な動きに慣れる。	小B(1)ア
	・食品群を特定し、ラベルを使用して食品を選択する。	小B(3)ア(イ)
	第 5 学年	
	・食品中の主な栄養素を考慮して、適切な栄養の原則に基づいて正しく選び、保存し、使用する。	小B(3)ア(イ)
	・体の成長を評価し、自分に合ったアクティブな動きを定期的に選択することを習慣にする方法を学ぶ。	

中「デザイン・技術」	第６学年	
	a 簡単な手縫いと飾り縫いの種類を理解し、応用例から小物作りの必要性を判断する	小B(5)ア(イ)
	b 繊維を理解し鑑別試験をすることで、天然物質や植物物質、化学物質の使用を分析する	中B(4)ア(イ)
	c 裁縫道具の適切な選択と安全な使い方	小B(5)ア(イ)
	d 簡単な手縫いと飾り縫いの種類を方法と使用法で分類し、小物を作り、縫い付けて装飾する	小B(5)イ
	e 応用例として結び細工やサンゴ工芸品の種類を知り、説明書や模式図を使って結び方を学び、それらを使って作品を作ったり飾ったりする	
	f 半完成品を使って各種冷菓を作る	
	g 食品衛生の例を説明する	中B(3)ア(イ)
	第７学年	
	a 風合い、色、伸びの違いから平織り、綾織り、朱子織りを判断する	中B(4)ア(イ)
	b 裁縫道具の使用法、把握、および指定された道具入れに保管することで、安全な使用法の遵守を実証する	中B(5)ア
	c 手縫いと飾り縫いを組み合わせて小物を作る	小B(5)イ
	d かぎ針や棒針を使って編み物を製作する	
	e 栄養豊富な食べ物や飲み物の例を挙げ、健康的で健康的な食事をすることの利点を説明する	小B(3)ア(ア)
	第８学年	
	a 伸びる、しわになる、縮む、形が崩れる、吸塵するなどの繊維素材の基本となる物理的、機械的、技術的特性を把握し、製作に使用する素材を選定する	中B(4)ア(イ)
	b 簡単なミシン縫いで小物を作る	小B(5)ア(イ)
	c スカートの縫い方	
	d 作品の製作に必要な材料、道具、作業の手順を計画する	
	e 製作計画に従ってスカートを縫製し、装飾する	
	f 棒針編みの裏編み、色編み、柄編み、課題別の物作り	
	g 用途に応じたテーブルセッティングのための食べ物、飲み物、お菓子の準備	小B(1)イ
	h 食事の文化とマナーを例を挙げて説明する	小B(1)イ
	第９学年	
	a 天然素材や化学複合素材の特性と利用法	中B(4)ア(イ)
	b ミシンの補助装置を使ってさまざまなステッチを縫う	中B(5)イ
	c 結び、伝統工芸、刺繍技術を使用した物のデザイン	
	d 伝統的な方法で製作したモンゴル民族衣装	
	e 伝統的な方法でモンゴルの服を縫製するために、製作図を使用して、材料、用具、および製作の手順を計画し記録する	
	f 手順と方法に従ってモンゴルの服を縫製し装飾する	
	g 伝統的な方法によるヨーグルト、アールツ（固体のヨーグルト）、アーロール（チーズの一種）の調製	小B(2)ア(オ)
	h 乳製品の伝統的な製造方法と現代の製造方法の違いを明確にする	小B(2)ア(オ)

モンゴル国教育科学省(2019b)、文部科学省(2017a)より筆者作成

また、表 8 はわが国の平成 29 年版学習指導要領に示された小学校「家庭」の内容を中心として、表 9 は同中学校「技術・家庭（家庭分野）」の内容を中心として、モンゴル国の初等・中等教育カリキュラムにおける教科「美術・技術」「健康」「デザイン・技術」の内容を比較したものである。以下、両者の視点から比較検討していくことにする。

表 8　わが国の平成 29 年版学習指導要領に示された小学校「家庭」の内容とモンゴル国初等・中等教育カリキュラムにおける教科「美術・技術」「健康」「デザイン・技術」の内容の比較

小学校「家庭」	モンゴル国 小「美術・技術」「健康」	モンゴル国 中「デザイン・技術」
A　家族・家庭生活		なし
B　衣食住の生活		
(1) 食事の役割		
ア　食事の役割と食事の大切さ、日常の食事の仕方	小「健康」	
イ　楽しく食べるための食事の仕方の工夫		8年g、8年h
(2) 調理の基礎		
ア（ア）材料の分量や手順、調理計画		
（イ）用具や食器の安全で衛生的な取扱い、加熱用調理器具の安全な取扱い		
（ウ）材料に応じた洗い方、調理に適した切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後片付け		
（エ）材料に適したゆで方、いため方	小「美術・技術」	
（オ）伝統的な日常食の米飯及びみそ汁の調理の仕方		9年g、9年h
イ　おいしく食べるための調理計画及び調理の工夫		

(3) 栄養を考えた食事		
ア（ア）体に必要な栄養素の種類と働き		7年e
（イ）食品の栄養的な特徴と組合せ	小「健康」	
（ウ）献立を構成する要素、献立作成の方法		
イ　1食分の献立の工夫		
(4) 衣服の着用と手入れ		
ア（ア）衣服の主な働き、日常着の快適な着方		
（イ）日常着の手入れ、ボタン付け及び洗濯の仕方		
イ　日常着の快適な着方や手入れの工夫		
(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作		
ア（ア）製作に必要な材料や手順、製作計画		
（イ）手縫いやミシン縫いによる縫い方、用具の安全な取扱い	小「美術・技術」	6年a、6年c、8年b
イ　生活を豊かにするための布を用いた物の製作計画及び製作の工夫	小「美術・技術」	6年d、7年c
(6) 快適な住まい方		
ア（ア）住まいの主な働き、季節の変化に合わせた生活の大切さや住まい方		
（イ）住まいの整理・整頓や清掃の仕方		
イ　季節の変化に合わせた住まい方、整理・整頓や清掃の仕方の工夫		
C　消費生活・環境		なし

モンゴル国教育科学省(2019b)、文部科学省(2017a)より筆者作成

表9　わが国の平成29年版学習指導要領に示された中学校「技術・家庭（家庭分野）」の内容とモンゴル国初等・中等教育カリキュラムにおける教科「美術・技術」「健康」「デザイン・技術」の内容の比較

平成29年版中学校指導要領「技術・家庭（家庭分野）」	モンゴル国 小「美術・技術」「健康」	モンゴル国 「デザイン・技術」
A　家族・家庭生活		なし
B　衣食住の生活		
(1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴		
ア（ア）食事が果たす役割		
（イ）中学生の栄養の特徴、健康によい食習慣		
イ　健康によい食習慣の工夫		
(2) 中学生に必要な栄養を満たす食事		
ア（ア）栄養素の種類と働き、食品の栄養的特質		
（イ）中学生の1日に必要な食品の種類と概量、献立作成の方法		
イ　中学生の1日分の献立の工夫		
(3) 日常食の調理と地域の食文化		
ア（ア）用途に応じた食品の選択		
（イ）食品や調理用具等の安全と衛生に留意した管理		6年g
（ウ）材料に適した加熱調理の仕方、基礎的な日常食の調理		
（エ）地域の食文化、地域の食材を用いた和食の調理		
イ　日常の1食分のための食品の選択と調理計画及び調理の工夫		
(4) 衣服の選択と手入れ		
ア（ア）衣服と社会生活との関わり、目的に応じた着用や個性を生かす着用、衣服の選択		
（イ）衣服の計画的な活用、衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れ		6年b、7年a、8年a、9年a
イ　日常着の選択や手入れの工夫		
(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作		
ア　製作する物に適した材料や縫い方、用具の安全な取扱い		7年b
イ　生活を豊かにするための資源や環境に配慮した布を用いた物の製作計画及び製作の工夫		9年b
(6) 住居の機能と安全な住まい方		
ア（ア）家族の生活と住空間との関わり、住居の基本的な機能		
（イ）家族の安全を考えた住空間の整え方		
イ　家族の安全を考えた住空間の整え方の工夫		
(7) 衣食住の生活についての課題と実践		
ア　食生活、衣生活、住生活についての課題と計画、実践、評価		
C　消費生活・環境		なし

モンゴル国教育科学省(2019b)、文部科学省(2017a)より筆者作成

(1) モンゴル国初等・中等教育カリキュラム「美術・技術」「健康」「デザイン・技術」における家庭科教育

わが国の小・中学校家庭科はどちらも「家族・家庭生活」「衣食住の生活」「消費生活・環境」の 3 つの内容を学習するのに対して、モンゴル国の小学校「美術・技術」「健康」及び中学校「デザイン・技術」では衣と食に関する内容のみの学習となっている。また、わが国では衣食住の内容が概ね食 3：衣 2：住 1 と食に重きが置かれているのに対して、中学校「デザイン・技術」では衣の内容に重きが置かれている。

食の内容について、栄養や食品衛生、調理用具の安全な使い方、テーブルマナー等、わが国の家庭科とほぼ同様の学習が計画されている。日常食の調理についてはサンドイッチが取りあげられており、伝統食の調理についても扱われていた。

衣の内容については、手縫いやミシン縫いによる製作が計画されている点がわが国の家庭科と同様である。さらに中学校「技術・デザイン」では、スカートの製作、かぎ針や棒針を使った編物の製作といった、過去にわが国の家庭科でも扱っていた内容が設定されている。これらに加えて、結び細工やサンゴ工芸品といったモンゴルの伝統工芸やモンゴルの民族衣装についても製作実習が計画されている等、衣に関する伝統文化を大切にし、継承しようとしている姿勢を読み取ることができた。

その一方で、住生活や家族関係、消費生活に関する学習は位置づけられていない。特に住生活については、冬季は氷点下何十度となる地理的条件下における住まい方や、ゲルの構造に込められた工夫点等、学びの多い学習が期待できる内容が多くある。今後このような学習内容を位置付けていく必要があろう。

もう一点は履修の方法である。先述したように、中学校における衣食の学習は「生徒は性別に関係なく同じ内容を学ぶ」ことにはなっているものの、「繊維・食品加工技術、木材・金属加工技術の 2 つのサブグループを選択して学ぶ」とされている。本研究では明らかにできなかったが、もしどちらか一方のグループのみを選択する履修方法であるならば、衣食の学習をすることなく義務教育を終える生徒が存在することになる。男女平等の世界的潮流の中においてその実現を目指すためには、伝統的な性別役割分業によらずお互いが共に仕事も家事も担っていく必要があるため、一部の生徒のみが衣食について学ぶのではなく、全生徒が学ぶことができるカリキュラムの構築が必要となるであろう。

(2) わが国の小学校「家庭」・中学校「技術・家庭（家庭分野）」における家庭科教育

それでは、モンゴル国のカリキュラムの分析の結果から、わが国の家庭科教育に対してどのような示唆が得られるであろうか。

わが国の家庭科の内容と小学校「美術・技術」「健康」及び中学校「デザイン・技術」のそれとを比較すると、確かにわが国の方が幅広く、そして詳しく内容が設定されているが、一部の内容は中学校「デザイン・技術」にしか位置付けられていない。それは衣に関する内容で、かぎ針や棒針を使った編物の製作、スカートの製作、そして伝統衣装や伝統工芸についてである。

わが国の家庭科は、戦前において女子の良妻賢母主義教育の一翼を担った「家事裁縫科」を否定し、民主的な家族関係を根底とした家庭建設者の育成を目指す教科として、小学校の第 5・6 学年に位置付けられた。その時の新制中学校発足時には「職業」という名称で教科として位置付けられ、その後「職業・家庭」となり、1958 年に現在まで続く「技術・家庭科」となった。当時からしばらく男女別修の時期が続くが、1989 年の改訂により履修領域に男女による差異を設けない男女共修の形となった（三沢・勝田, 2019）。改訂の度に内容の精選や見直し等があり、現在では表 8、表 9 に示す学習内容となっているが、かつてはわが国の家庭科においてもスカートやブラウスといった衣服製作、編物や手芸といった内容が含まれていた。現在の技術・家庭科（家庭分野）ではこれらの学習は含まれておらず、伝統的な衣装については、指導要領の解説の中に「和服は日本の伝統的な衣服であり、冠婚葬祭や儀式等で着用することや、地域の祭りなどで浴衣を着用することなどについて触れるようにする。また、和服と洋服の構成や着方の違いに気付くようにするとともに、和服の基本的な着装を扱うことも考えられる」（文部科学省,2017b）とのみ記され、和服のうち浴衣の着装が扱われているのみである。これに関して、生活に必要な技能習得が十分でない、製作過程を知らないために物の価値や大切さの理解が困難である、といった報告もなされている（西之園・中村,2000）。衣に関する伝統文化の継承という面も合わせて、今後の衣に関する学習のあり方を再検討する必要があろう。

4. まとめと今後の課題

本研究では、モンゴル国の義務教育カリキュラムにおける家庭科教育の位置付けを明らかにし、わが国の小学校・中学校における家庭科教育との違いについて検証した。

その結果、小学校、中学校ともに教科としての家庭科は存在していなかった。しかし、小学校では教科「美術・技術」の中に簡単な調理に関する学習、教科「健康」の中に栄養素に関する学習が位置付けられていた。また中学校では、教科「デザイン・技術」の中に衣生活と食生活の学習が位置付けられていた。モンゴル国の家庭科学習とわが国のそれを比較すると、モンゴル国の家庭科学習は衣・食生活領域の比重が大きいことが分かった。さらに衣の学習ではスカートの製作、編物、手芸、民族衣装とその製作のように、わが国の家庭科よりも高度な内容も含まれており、衣生活に関する技能の習得に重点が置かれていることが分かった。その一方で、住生活や家族、消費生活の内容が存在しない、衣食の内容は選択履修の可能性がある等の課題も明らかになった。

今後は、このカリキュラムを基にして教科書がどのように編集されているのか、さらにこれらに基づいてどのような授業が展開されているのか、といった実践レベルでの分析を行い、わが国とモンゴル国における家庭科教育の充実を目指していきたい。

本研究は、JSPS 科研費 JP22K00699 の支援を受けたものである。

引用文献

Ariunjargal, L.（2021）.「5 モンゴルー国際基準を目指すモンゴル教育」大塚豊（監修）日暮トモ子（編著）『アジア教育情報シリーズ　1 巻　東アジア・大洋州編』一藝社, 82-97

井場麻美（2016）.「モンゴルの教育事情についてー国際スタンダードとの一致ー」独立行政法人日本学生支援機構『ウェブマガジン　留学交流』61, 16-20
（https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/__icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201604ibaasami.pdf）
（2022 年 12 月 28 日）

大竹美登利（監修）（2015）.『教科教育学シリーズ⑦ 家庭科教育』一藝社.

モンゴル国教育科学省（2019a）.『初等教育カリキュラム 改訂第 2 版』
（https://cdn.greensoft.mn/uploads/users/2649/files/Curriculum/EBS/Baga.pdf）（2022 年 12 月 28 日）

モンゴル国教育科学省（2019b）.『中等教育カリキュラム 改訂第 2 版』
（https://cdn.greensoft.mn/uploads/users/2649/files/Curriculum/EBS/Suuri.pdf）（2022 年 12 月 28 日）

文部科学省 (2017a). 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　家庭編』
(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_009.pdf)
(2022 年 12 月 28 日)

文部科学省 (2017b). 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　技術・家庭編』
(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_009.pdf)
(2022 年 12 月 28 日)

三沢徳枝・勝田映子（監修）（2019）.『初等家庭科教育法』ミネルヴァ書房.

西之園君子・中村民恵（2000）.「戦後における小・中・高等学校の家庭科教育の変遷（第 1 報）―学習指導要領における被服教育指導内容の改訂―」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』30, 11-29

Positioning of Home Economics Education in Mongolian Compulsory Education Curriculum : Through Comparison with Home Economics Education in Japan

Shogo HARADA
(Okayama University of Science)

In this study, the author investigated the position of home economics education in the compulsory education curriculum in Mongolia and the difference between home economics education in elementary and junior high schools in Japan.

Due to the 2012 revision of the Education Law, the Mongolian school education system shifted to a five-year elementary school system, a four-year junior high school system, and a three-year high school system, i.e. the 5-4-3. In elementary schools, there was no home economics as a subject, but learning about clothing and eating habits was positioned in the subject "Art Technology" and "Health". In junior high schools, there was no home economics as a subject, but learning about clothing and eating habits was positioned in the subject "Design Techniques". We found that Mongolian home economics learning is focused on skills, compared with the content of home economics in Japan.

Keywords: Curriculum, Home Economics, Art Technology, Health, Design Technology, Clothing, Diet